

# 海岸林再生への取組み

～最近の取組み～

## 1 松くい虫被害の急拡大

加賀海岸国有林では、昭和62年ごろから松くい虫被害が目立ち始め、健全な松をマツ材線虫から守るため、薬剤の散布による防除や、被害木を伐り倒し、樹幹内にあるマツノマダラカミキリの幼虫をくん蒸処理する駆除を実施し、マツ林の保全に努めました。しかし、平成15年頃から急速に松くい虫被害が拡大し、マツ林が大面積にわたり枯れてしまいました(写真-1)。なお、松枯れ被害をまぬがれた海岸林については、引き続き保全しています。



加賀海岸国有林の松くい虫被害箇所  
(写真-1)

## 2 海岸林の再生への取組み

松食い虫被害により上木のクロマツが一斉に枯れたことで、マツ林の下で生育していたクロマツの稚樹や落下した種が一斉に発芽、生長し、大規模なクロマツ天然下種更新地が発生しました。更新地を調査したところ、1ha当たり40万本のクロマツの稚樹がありました(写真-2)。



大規模なクロマツ天然下種更新地  
(写真-2)

この大発生したクロマツの稚樹を健全に育成するためには早期からの密度管理が必要と考え、平成21年度から石川県林業試験場と共同でクロマツの密度管理試験を行いました(写真-3)。

試験地の設定や調査には、多くの地元住民の方々にもご協力いただきました(写真-4)。



地元住民参加による試験地の設定作業(写真-4)

この試験の結果、直径成長は疎仕立で最も太くなるものの、事業として密度管理を実施するには、作業が簡単で効果も高い帯仕立が適していると考えられました。

一方、高密度に天然更新したクロマツ稚樹を帯状に刈払機により刈り払うには、効率性や労働過重、安全性の面で負荷が大きいと考え、重機を使った帯状伐採の有効性について石川県林業試験場と共同で調査を行いました(写真-5)。



この結果、重機使用の密度管理は、刈払機使用よりも効率よく、しかも労働過重防止、安全性の面においても有効な手法であることが確認できました。



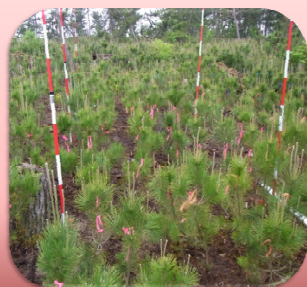
重機による帯状伐採と2ヵ月後の状況  
(写真-5)

今後は、実施面積を拡大し、重機使用の課題等を検討し、事業化できるかどうか検証することとしています。

## 密度管理試験地 (写真-3)



疎仕立 (1万本/ha)



密仕立 (5万本/ha)



帯仕立



放置区